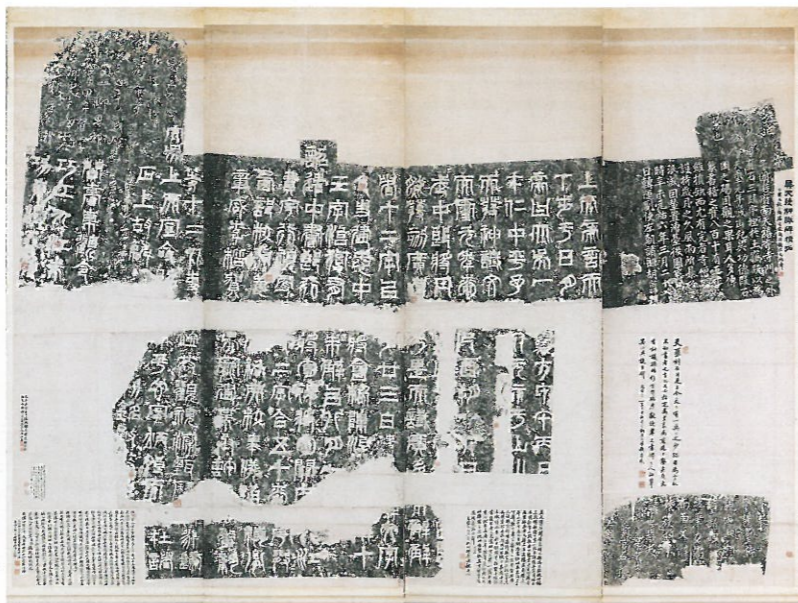


特別陳列

中国拓本—師古齋コレクション

2012年1月7日～2月5日

師古齋コレクションとは、大阪出身の実業家 岡村蓉二(号商石、1910～1991)が蒐集した中国拓本のコレクションです。昭和10年(1935)ころ、最初は習字の手本として集め始めたそうですが、その金石の気に魅せられて蒐集につとめるようになり、総数は450件におよびました。なかでも、昭和13年から18年にかけての東京に転勤した5年間には、300本ほどを手に入れたということです。図の「天発神識碑」正本も昭和15年に西宮の家を売却して購入したもので、楊逸の題、王瑾・羅振玉らの跋のある名品です。



天発神識碑 吳・天璽元年(276) 本館蔵(師古齋コレクション)

平常陳列

特集展示

I / 9月17日(土)～10月16日(日)
II / 10月20日(木)～11月23日(水・祝)

雲の上を行く—仏教美術 I・II

関西一円の寺社やお預かりしている作品及び館蔵作品の中から、国宝・重要文化財を中心に、仏教美術—絵画・彫刻・工芸・書跡の代表的な優品を一堂に展示いたします。
※なおIとIIで絵画作品を中心に展示替えを行います。

中国書画 I—館蔵・寄託の優品
中国書画 II—阿部コレクション

大阪市立美術館の名を世界に知らしめている中国書画の作品群。館蔵品のほか寺院や個人からの寄託品を含めたその精萃を、二期に分けて紹介します。中心となる阿部コレクションに含まれる作品は第II期に、それ以外の作品は第I期に展示します。



王武 葉鶏頭図 清・康熙15年(1676) 本館蔵 第I期に展示



国宝 金銀鍍透彫 華籠 鎌倉時代(13世紀) 滋賀・神照寺蔵

重要文化財 宮素然 明妃出塞図 金(12-13世紀) 本館蔵(阿部コレクション) 第II期に展示

鍋島焼の外側面文様について

鍋島焼の作品の主体は皿類である。その特色のひとつには、全面に青磁釉を施した作品と初期鍋島の一部の献上品を除いて、皿類の外側面と丈の高い高台部分に限定された染付文様が施されていることがある。内面の文様を表文様、外側面・高台の文様を裏文様などとも通称するが、作品の鑑賞のあり方は表文様が主体であって、花鳥文・植物文・山水文などは絵画性が高く、器物文や幾何学文はデザイン性に優れて精緻である。デザイン性や精緻さの点では裏文様も遜色のないほどの完成度を持ってはいるものの、今ひとつ地味で楽しさに欠けるため、従来はそれ程注意がはられてこなかった。

ところが、近年ではこの裏文様に注目して編年的な研究がはじめられ、検討が深められてきた。この小稿では、外側面の代表的な文様である七宝紐結文を取り上げて、田原コレクションにおける文様変化の大筋を整理したい。なお、古典的な編年観に近いものの、本稿では鍋島焼を初期鍋島(はじまりから延宝期の終わり頃)、盛期鍋島(天和・貞享・元禄期頃から寛政期の終わり頃)、後期鍋島(宝暦期頃から明治4年まで)の三期に区分してその展開を考える。

田原コレクション118件中、七宝紐結文が施された作例は29件あり、全部で12種類ある。この文様は初期の後半から登場し、「色絵龍唐花文十二角皿」(七寸皿)の裏文様には、七宝が1つの作例(挿図1)がある。盛期になると、尺皿では「染付雪景山水図皿」(挿図2)が、七寸皿では「色絵紅葉流水図皿」(挿図3)と同工品が4例(近代の盛期の模倣品にも1例)ある。五寸皿には4種あって、「色絵花籠図縁皿」(挿図4)、「色絵菊花流水文縁皿」(挿図5)と同工品が2例、「色絵青海波椿樹図縁皿」(挿図6)、「色絵牡丹唐草文皿」(挿図7)と同工品が7例ある。後期には、尺皿では「色絵金彩梅樹図皿」(挿図8)が、七寸皿では「染付

雲居花海棠図皿」(挿図9)と同工品が2例、五寸皿では「染付雲居菊花図皿」(挿図10)と同工品が1例、三寸皿では「染付芥子図皿」(挿図11)と、「色絵万年青図皿」(挿図12)がある。

七宝を1つだけ持つ作品は初期では七寸皿(挿図1)で、紐結びが左右2つでさらに長い紐を4本持つ。盛期では五寸の縁皿のみ(挿図5)に登場し、後期では三寸皿(挿図11)にもある。なお、五寸の縁皿には紐結びが4つの変り種(挿図6)もある。七宝が6つある作品は盛期の七寸皿(挿図3)で規格化されるが、その形状は後期の七寸皿(挿図9)まで踏襲される。また、五寸の縁皿のひとつには縦の紐結びがない変り種(挿図4)もある。七宝が4つある作品は、盛期では尺皿(挿図2)と五寸皿(挿図7)に登場するが、文様構成が異なり、後者の例は後期の五寸皿(挿図10)に踏襲され、幕末～明治時代初期の三寸皿(挿図12)では紐の文様構成が複雑になった新規のものが登場する。珍しい形状のものには後期の尺皿(挿図8)がある。中心と左右とが異なる形態の七宝が横一列に3つ連なり、紐の結び目や長めの紐も他にはない形状で表現される。

なお、外側面の文様は、(挿図12)の2組以外では、みな3組ずつ施文される。また、紐の表現では、初期と盛期では2本線で縁取りした後に中をダミ染めするが、後期の場合は一筆で描いてしまい、幕末～明治初期の(挿図12)では、紐というよりは糸のような表現となっている。また、高台の文様との関係では、(挿図1)の雷文以外は、みな櫛目文である。

七宝を紐で結んでつないだ同様な文様であるが、皿の大きさによって、また時代によって、一定の規格の中で七宝の数や配置のデザインをかえて少しずつ変化してきたことが理解できる。目で見て楽しむといった鑑賞ではないが、分析してみると面白いといった楽しみ方が、鍋島焼の裏文様には感じられる。

(守屋 雅史)

